

鬼退治する侍の話

三倉..鬼退治をしている旅の侍

佐助..佐倉と共に旅をしている青年

四郎..一人で鬼と戦っていた少年

三倉「いやあのどかなものだねえ、この辺は。」

佐助「周辺の国は同盟を結んでいる関係上、大きな戦も起きていないので。」

三倉「なるほど、仲良しなんだねえ。」

佐助「納めている犬塚殿は聰明で、民のことを第一に考えられている人物だそうです。」

三倉「以前お会いしたことあるよ、剣の腕も相当な人だつたね。」

佐助「ええ、良く覚えておいでで。」

三倉「あの人納めてるんなら納得だ。」

佐助「そろそろ関所が見える頃です、手形はなくしていませんか?」

三倉「過保護だねえ佐助は、大丈夫だよ。」

佐助「前回無くされた時は丸二日探し回る羽目になりましたが。」

三倉「ごめんごめん、ほらもう無くさないように紐でしつかり固定してるでしょ。」

佐助「はあ……三倉様。」

三倉「うん、鬼の気配だ、急ぎう。」

SE..走り出す音

四郎「クソ！てめえらー！」から先には一步も進ませねえぞ！」

SE..剣戟の音

四郎「数ばかり揃えやがって！」

SE..剣を弾く音

三倉 「後ろがお留守だよ。」

四郎 「な、なんだてめえは。」

三倉 「通りすがりの旅人だよ、助太刀いたす、なんちやつて。」

四郎 「とつとと逃げろ！こいつらは」

三倉 「鬼、でしょ。だいじょーぶだいじょーぶ。慣れてるから。」

SE：切り裂く音

四郎 「なんなんだ、コイツ…強え…」

三倉 「もう疲れたかい？」

四郎 「馬鹿にすんな！オイラはまだまだやれらい！」

三倉 「そう、じやあとと片づけようか。」

SE：激しい剣戟の音

四郎 「はあ…はあ…はあ…」

三倉 「お疲れ様、いい腕だったよ、えーと」

四郎 「……オイラは四郎…アンタは？」

三倉 「僕は佐倉、さつきも言つたけど旅の者だよ。」

四郎 「助かった、正直あの数相手はオイラでもしんどかつた。」

三倉 「それは良かつた…けどなんで君みたいな子供が一人で？関所のお侍さんは？」

四郎 「大将がやられて皆逃げちまつた。」

三倉 「子供一人を置いて？」

四郎 「違う！オイラが一番強いから、皆を逃がすために残つたんだ！」

三倉 「そう、良く頑張ったね四郎。」

四郎 「別に褒められたくてやつてるわけじゃねーよ。」

三倉 「じゃあ四郎はなんの為に頑張つたんだい？」

四郎 「……オヤジへの恩返しだ。」

三倉 「お父さん？」

四郎 「ここの大将やつてたんだ、もう死んじまつたけど。」

三倉 「お父さんの名前は？」

四郎 「犬塚、犬塚政義。」

三倉 「犬塚殿、ご自身で先陣を切つて戦死なされたのか。」

四郎 「アンタオヤジのこと知つてんのか？」

三倉 「昔むかーしね、遠くから見たことがあるくらいだよ。」

四郎 「そつか。」

三倉 「ご立派な御父上だね、犬塚殿は。」

四郎 「オヤジは皆を守るために死んだんだ、だからオイラも皆を守らなきや。」

三倉 「そうか……そうだね・佐助。」

佐助 「ここに。」

四郎 「うわあっ！急に出てきた。」

三倉 「城内の様子を見てきて。」

佐助 「御意。」

四郎 「消えた・アソツは？」

三倉 「忍者だよ忍者、すつごい頼りになるんだ。」

四郎 「初めて見た、ホントにいるんだな忍者つて。」

三倉 「頼りになるよ佐助は。実はさつきもずっと僕たちの後ろを守ってくれてたんだから。」

四郎 「ぜ、全然気づかなかつた…」

四郎 「なあ、なんでアンタあんなに強いんだ？」

三倉 「僕？うーん小さい頃からいっぱい鍛えたからかな。」

四郎 「オイラもアンタみたいに強くなれるか？」

三倉 「強くなりたいのかい、四郎は。」

四郎 「さつきも言つたけどオイラは恩返しがしたいんだ。だからもつと強くならないと。」

三倉 「どうして御父上に恩返しを？」

四郎 「オイラはオヤジに拾われたんだ。」

三倉 「なるほど。」

四郎 「身寄りのなかつたオイラを拾つて、育ててくれて、剣も教えてくれた。そんなオヤジに、オイラは何も返せてねえんだ。」

三倉 「いい御父上だつたんだね。」

四郎 「そうだ！だからオイラはオヤジの代わりに皆を守らなくちやならねえ！」

三倉 「だから強くなりたいって？」

四郎 「ああ、頼むよ、アンタすげえ強えじやん。」

三倉 「駄目だね。」

四郎 「なんでっ！」

三倉 「自分の生きる意味を他人に委ねちゃいけない。」

四郎 「意味がわからんねえ！」

三倉 「まあもうしばらくは僕がここにいて一緒に闘つてあげるからさ、少しは考えてみるといい。」

四郎 「なにを？」

三倉 「君自身の生きる意味をさ。」

三倉 「で、どうだつた？」

佐助 「犬塚殿が戦死されたのは一週間ほど前でした。」

三倉 「その間ずっと一人で闘つてたのか、四郎は。」

佐助 「ええ、その間に都へ人をやり代わりの城主を呼んでいるそうです。」

三倉 「関所はほつたらかしかい？」

佐助 「あの小僧、場内ではあまり評判が良くなく」

三倉 「拾われた子だから？」

佐助 「ええ、むしろ戦死してくれた方が助かるとほざく始末です。」

三倉 「一体誰のおかげで自分たちが生きているのか、なにもわかっちゃいないんだね。」

佐助 「あの量の鬼がなだれ込めば城下どころか城まで落ちるでしょうね。」

三倉 「ちょっと多すぎだよね？」

佐助 「地理的に、南と東から流れできているのでしょう、ここが丁度ぶつかる地点なので。」

三倉 「今までよく持ちこたえてたよ、犬塚殿は。」

佐助 「しかしその犬塚殿ももうおりませぬ故、これ以上はもたぬでしょう。」

三倉 「大本を叩けばちりじりになつてくんだけどね。」

佐助 「お館様。」

三倉 「その呼び方やめてつてば、今は只の旅の侍だよ。」

佐助 「失礼。三倉様、またよからぬことを考えておいでで？」

三倉 「またつてなにさまたつて。」

佐助 「ご自身の使命をお忘れなきよう。」

三倉 「わかつてるつて。」

三倉 「今日も沢山鬼が来たねえ。」

四郎 「はあっ…はあっ…なん、でアンタはそんなに余裕なんだよ。」

三倉 「最初に言つたでしょ、慣れてるんだよ僕は。」

四郎 「鬼を斬るのをか？」

三倉 「そ。」

四郎 「教えてくれよ、オイラにも。」

三倉 「やーだね。」

四郎 「ケチ。」

三倉 「今のは四郎に教えるも無駄だからね。」

四郎 「なんだよそれ。」

三倉 「君自身の生きる意味、わかつた？」

四郎 「……わかんねえ。」

三倉 「じゃあ駄目。」

SE:歩き去る音

四郎 「なんなんだよ！ちくしょう！」

佐助 「荒れているな、小僧。」

四郎 「うわあ！つて忍者の…佐助だっけ？」

佐助 「左様。」

四郎 「急に出てくるからびっくりしたじやねえか。」

佐助 「鍛錬が足らぬ故。」

四郎 「アンタでもいいや、俺を鍛えてくれねえか？」

佐助 「それは無理だ。」

四郎 「なんで？」

佐助 「拙者は忍の鍛え方しか知らぬ。小僧は忍になりたいのか？」

四郎 「いや、オイラはオヤジみてえな剣士になりてえんだ。」

佐助 「ではやはり無理だ。」

四郎 「なんだよ、どいつもこいつもさ。」

佐助 「……一つ、昔話をしよう。」

四郎 「急になんだよ。」

佐助 「まあ聞け。」

四郎 「……」

佐助 「その昔、後継ぎに恵まれぬ城主がいたそうだ。なかなか男児の生まれぬその城主は唯一生まれておった女兒を男子として育てた。」

四郎 「なんだそりや。」

佐助 「男子として育てられたその子は父の期待に応えようと、自分を捨て後継ぎとなるべく

己を鍛え続けた。」

四郎 「なんかオイラと似てんな、ソイツ。」

佐助 「だが、その城主についてに待望の男児が生まれた。」

四郎 「え。」

佐助 「今更最初の子が女子であつたとは言えぬ。だが家は男児に継がせたい、その城主はどうしたと思う?」

四郎 「…わかんねえ。」

佐助 「最初の子を拾われた子としたのよ。なので後に生まれた子こそが正当な後継ぎであると。」

四郎 「なんだそりや! 最初の子がかわいそうじやねえか!」

佐助 「父の為にと己を捨て続けたその子は、急に全てを失つた。」

四郎 「あんまりじやねえか、そんなの…」

佐助 「小僧、今ならわかるんじやないのか。」

四郎 「なにをだよ。」

佐助 「三倉様が貴様に言つたことの意味だ。」

四郎 「……まさか、今の話」

佐助 「拙者は只の昔話を語つたまでだ。」

四郎 「……」

佐助 「貴様、自分の城内での評判を知つているな?」

四郎 「なんでアンタが」

佐助 「だから先程の話にあれほど怒った。自身と重ね合わせてしまつたから。」

四郎 「オイラは、」

佐助 「三倉様の言葉、もう一度よく考えてみるとことだ。」

四郎 「おいつ…つてもういねえ。」

SE:剣戟の音

三倉 「どうした四郎? 今日は剣の腕が鈍いね。」

四郎 「うるせえよ。」

三倉 「何に怒つているのか知らないけど、そのままじや君、死ぬよ?」

四郎 「アンタのせいだろ!」

三倉 「僕? 何かしたつけ?」

四郎 「アンタの言つてること全つ然わつかんねえよ!」

三倉 「ははははは。」

四郎 「なに笑ってやがる！」

三倉 「いやいや、四郎は素直でいいね。」

四郎 「でもな、いつこわかったことがある。」

三倉 「なんだい？」

四郎 「オイラは別に皆を守りたかったわけじやねえってことだ。」

三倉 「へえ。」

四郎 「オヤジが口癖みてえに言つてたから真似してただけなんだよ。」

三倉 「じゃあ今は何のために闘つてるんだい？」

四郎 「親父を殺したこいつらが憎い、絶対え許さねえ！」

三倉 「いいね、四郎。」

四郎 「なにがだよ！」

三倉 「その怒りの気持ちは君だけのものだ、他の誰でもない君自身のね。」

四郎 「それがどうしつたつて言うんだ。」

三倉 「今の君なら強くなれるってことだよ。」

四郎 「それって」

三倉 「君が僕の家来になるんなら、剣を教えよう。」

四郎 「オヤジの城を、皆を見捨てろって？」

三倉 「すぐに代わりの城主が来る、そうなつたら君はお払い箱さ。」

四郎 「わかつてんだよそんなこたあ！」

三倉 「だからさ、僕と一緒に行こうじゃないか。」

四郎 「……アンタ、なんのために旅してるんだ？」

三倉 「あれ？ 言つてなかつたつけ？」

四郎 「そんなんで一緒に来いって言つてんのかよ！」

三倉 「僕たちの旅はね」

三倉 「鬼退治の旅さ。」

三倉 「と、いうわけで新しい仲間の四郎だ。」

四郎 「よろしくな。」

佐助 「まずは言葉遣いからだな、小僧。」

四郎 「なんだよ、同じ家来だろ。」

佐助 「年も歴も拙者の方が上だ、敬え。」

三倉 「まあまあ、もう知つてるとと思うけど」つちが佐助、苗字は・猿飛だっけ？」

佐助 「猿飛佐助、三倉様の一の家来だ。」

四郎 「一を強調しやがつて。」

三倉 「四郎にも苗字があつたほうがいいね。」

四郎 「いらねえよ、そんなの。」

三倉 「君は今日から犬塚を名乗り給え。」

四郎 「つ…そりやあ」

三倉 「君の気持を忘れないためにも、ね。」

四郎 「……わかつたよ、オイラは今日から犬塚四郎だ。」

三倉 「うん、いい名前だ。」

四郎 「そういうやまだアンタの名前聴いてなかつたな。」

三倉 「あれ、そうだっけ？」

四郎 「そうだよ。」

三倉 「僕の名前はね、桃太郎。三倉桃太郎だよ。」